

中学校美術科教授用資料

地域アートマップ

日本造形教育研究会 編



開隆堂

地域アートマップ

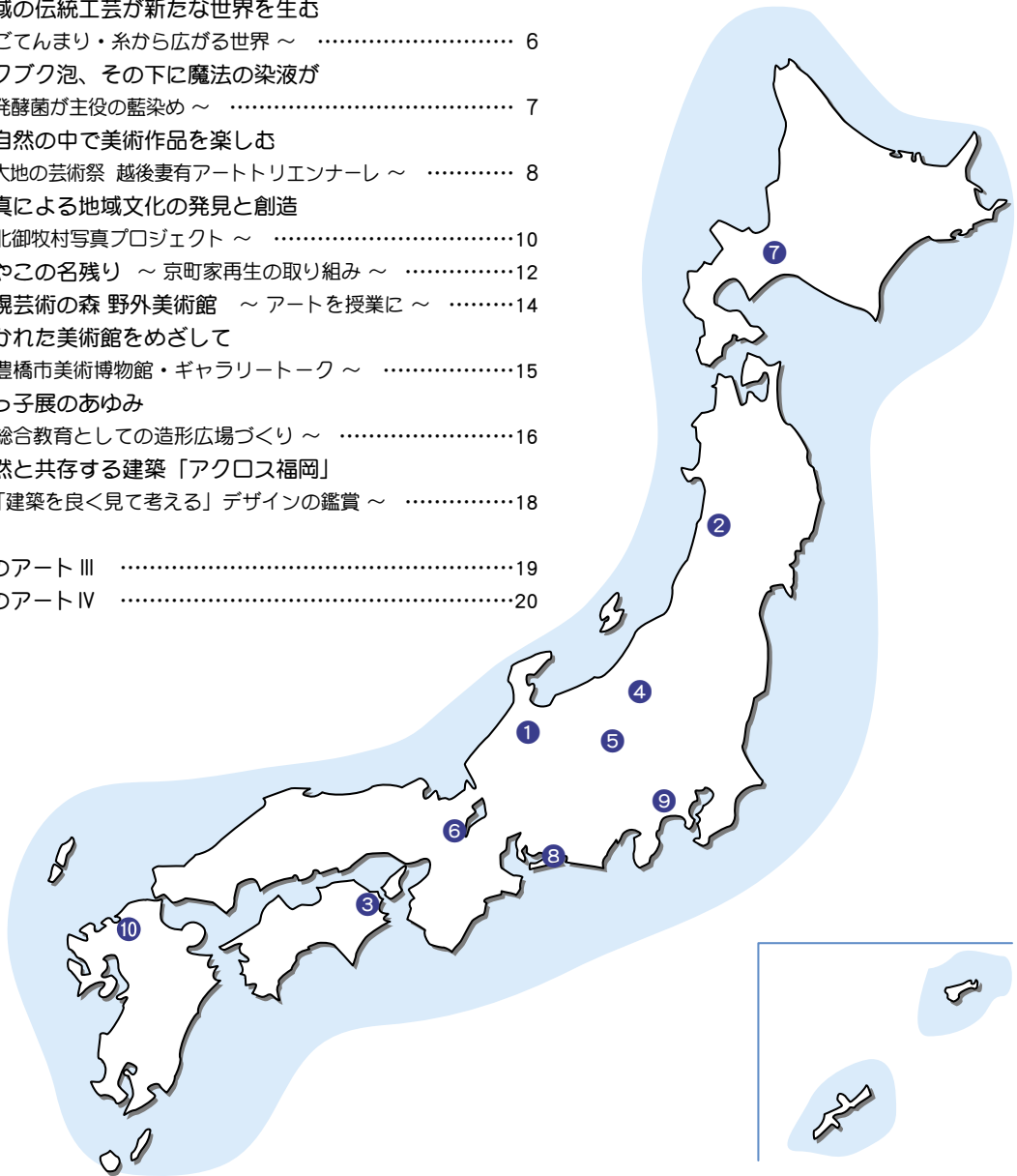
もくじ

| | |
|---|----|
| 地域のアートⅠ | 1 |
| 地域のアートⅡ | 2 |
| まえがき | 3 |
| ① 井波木彫刻のパブリックアート化への潮流 | 4 |
| ② 地域の伝統工芸が新たな世界を生む ～ ごてんまり・糸から広がる世界～ | 6 |
| ③ ブクブク泡、その下に魔法の染液が ～ 発酵菌が主役の藍染め～ | 7 |
| ④ 大自然の中で美術作品を楽しむ ～ 大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ～ | 8 |
| ⑤ 写真による地域文化の発見と創造 ～ 北御牧村写真プロジェクト～ | 10 |
| ⑥ みやこの名残り ～ 京町家再生の取り組み～ | 12 |
| ⑦ 札幌芸術の森 野外美術館 ～ アートを授業に～ | 14 |
| ⑧ 開かれた美術館をめざして ～ 豊橋市美術博物館・ギャラリートーク～ | 15 |
| ⑨ 風っ子展のあゆみ ～ 総合教育としての造形広場づくり～ | 16 |
| ⑩ 自然と共存する建築「アクロス福岡」 ～ 「建築を良く見て考える」デザインの鑑賞～ | 18 |
| 地域のアートⅢ | 19 |
| 地域のアートⅣ | 20 |

<表紙の写真>

(左上)
朝倉響子「二人」(札幌芸術の森 野外美術館)
作品を触り、同じポーズをとる中学生たち。

(右下)
海老塚耕一「水と風の皮膚」(大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ)
鉄板にあげられた無数の穴から水が流れ、鉄板に「皮膚」がつくられる。



地域のアート I



井波の木彫刻

富山県 (⇒本文p.4)



ごてんまり

秋田県 (⇒本文p.6)

四君子をモチーフとした井波欄間

「井波彫刻総合会館パンフレット」より



豊かな色彩と多種多様な幾何学模様が美しい
本荘地域を代表する手芸品。



藍染め

徳島県 (⇒本文p.7)



土中に埋められた藍がめにブクブク吹き出す「藍の華」

写真提供：2点とも新居製藍所（上板町）



刈り取り寸前の藍草

地域のアート

大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ

新潟県 (⇒本文 p.8)

松代町：「かまぼこ型倉庫プロジェクト」小沢剛



松代町：「花咲ける妻有」草間彌生

北御牧村写真プロジェクト

長野県 (⇒本文 p.10)



「北御牧村写真プロジェクト」佐藤時啓
村民とのコラボレーションによる作品



撮影の様子

まえがき

み さ わ か す み
三澤一実 (文教大学講師)

今日、私たちの生活はアートに触れる機会にあふれています。それは美術館であったり野外彫刻であったり、壁画や建築、メディアを介してのアートであったりします。もちろん、芸術作品のみがアートではありません。店のショウウィンドーや、その建物、野にある石仏や人が残した痕跡さえアートの対象になってくるのです。また最近では地域を巻き込んだアートイベントも盛んになってきました。学校週5日制の導入以降、各地で様々な子ども向けのワークショップなどが開かれています。美術館は将来の美術愛好者を育てる教育普及活動に力をそそぎ、学校ではNPOが仲介してアーティストが授業に関わる試みも見られるようになってきました。このように今日のアートイベントは、美術を愛好する大人たちを対象としたものから子どもたちをも巻き込んだ、より幅広い人々へ働きかけるものへと変わりつつあります。

私たちが生活する社会は様々な考えや立場、役割を持った人々の営みの上に成り立っています。アートはそのような人と人との接着剤になったり、潤滑油になったりしながら、生活を豊かに作りかえていく働きを担っています。今日の社会は、国際化、情報化が進み、個人を取り巻く世界が飛躍的に拡大していますが、その一方で人と人との直接的な“肌で感じる”関わりが希薄になりつつあります。人やものとの関わりを作り出すアートはこのような社会において人間的なバランスを保つために必要不可欠なものと言えるでしょう。そして、アートは人と人との関わりの中で生まれる文化についても常に創造的な刺激を与え続けているのです。

このようなアートの力を理解し身につけるために、美術の授業では思いを込めて作品に表したり、鑑賞活動で自他の作品や芸術家の作品を通して人間理解を深め、作品が生まれた社会や文化的背景を考えたりしています。つまり、私たちは美術を学ぶことによって、作品の背景に存在する人間を学んでいるのです。このように、美術が従来表現と鑑賞の学びを基礎とし、さらに人間理解、文化理解を深めていく手段とするならば、私たちは美術を教室に閉じこめておくことはできません。未来を築く子どもたちには積極的に地域のアートに関わらせていきたいものです。

まずは私たちが住む地域を見つめ直してみましょう。地域は私たちの生活を支え、生き方を考えさせてくれる土壌です。そこに育つ私たちは植物に例えられるかもしれません。りっぱな植物を育てるためには、栄養豊かな土壌が必要です。地域の文化は人やメディアを介し、繋がり合ったり、刺激しあったりしながら日本の文化を豊かに創り出していきます。教室で学んだ美術の学習は様々なアートと出会うことでさらにひろがりを持ち、未来の文化づくりに大きく関わっていくのです。

いなみ 井波木彫刻の

パブリックアート化への潮流



井波木彫刻の由来と現状

南砺市井波地域は、14世紀末、瑞泉寺建立を機に形成された門前町。浄土真宗による篤い信仰心が宮大工と彫り物大工の職人文化を育んだ。

木彫刻は江戸中期にその起源をもち、大正中期に木彫刻師の組織を設立。今は井波彫刻協同組合（以下、彫刻組合）に130人が集結し、井波を中心に約280人が木彫刻の生業に勤しむ。戦時中、帝展などに入選する職人が現れ、作家協会を結成。現在、井波美術協会（以下、美術協会）に漆芸家などを含み65名が加入。その内、半分は伝統木彫刻師で日展出品者は6割である。

この小さな町に伝統、現代の2つの強固な組織、狭い地域に集積した伝統木彫刻の技と人。このような文化的資源は世界でも珍しい。

海外ではドイツのオーバーアマガウ、インドネシアのバリ島マス村、イタリアのバルガルデナなど木彫刻に関する類似地域を確認済だが、井波はそれらに比肩できる特徴を保有している。



木彫刻を取り入れたバス停

井波木彫刻のパブリックアート化と教育・普及

1980年代後半の経済の好況期は地方文化や伝統産業の再評価という文化的至福をもたらした。1990年は井波開町600年の年。その前後に文化に関するハードの事業が集中。井波町総合文化センター（以下、文化センター）竣工、井波美術館開館、いなみ木彫りの里・創造館と井波彫刻総合会館のオープンが続いた。井波彫刻の教育・普及は、木彫りを顔とした町づくりへと官民一体となってその機運が一挙に高まった。

井波の街並みと景観を守る会が干支表札を提案。行政は呼応して、バス停など街具への木彫刻の導入を事業化、さらに高校前通りと文化センター緑地などに屋外彫刻が設置された。

官民連携の事業が続いた。彫刻組合の屋外の「大彫刻」設置、いなみ国際木彫刻キャンプ（以下、彫刻キャンプ）開催と作品の屋外設置（後述）、木彫りの里での彫刻体験教室、文化センターと美術協会連携による子供対象の造形サークル、井波わくわく塾によるパブリックアートマップの作成、まちなみアートinいなみの展開、八日町通り木彫部会の街灯への七福神の装飾彫刻設置など。現在は、商工会主導で彫刻組合とNPO心泉いなみが関わる商店の木彫看板の設置が進行中である。学校では彫刻キャンプへの協力、文化センター緑地の壁画製作、図工教材への彫刻キャンプの導入実践などが特筆される。

いなみ国際木彫刻キャンプの展開

井波彫刻の教育・普及とそのパブリックア

ト化運動のコアは彫刻キャンプ。これは4年毎の催事。第1回は1991年開催され、次回は2007年に南砺市主催で予定されている。目的は、伝統木彫刻の未来への継承、彫刻を核とした個性的な地域づくり、国際理解の促進などである。これは、美術協会が町に提案、その後彫刻組合、県芸術文化協会、報道機関や行政など官民一体で実施された。県内外のメセナ支援も大きい。

実施の中心は旧井波町、美術協会と彫刻組合であり、工芸美術の両組織を抜いてこの実施はありえない。それほど井波でしかできない草の根の国際イベント。小生は発案から評価まで17年間、日常レベルで深く関わってきた。

彫刻キャンプは異文化理解を忍ばせた木彫刻のパブリックアート化を主眼とするため、完成作品の多くは屋外設置。外光に映える木彫刻群には癒し効果がある。井波の木彫刻や景観の歴史かかつてないアートシーンが繰り広げられた。官民一体の相乗効果が功を奏したのだ。



いなみ国際木彫刻キャンプで制作中の
アフリカ・マラウィの作家



いなみ国際木彫刻キャンプの完成作品の展示風景。
右は中国の作家の作品

これからの課題

過去4回の彫刻キャンプの作品は29か国の作家の作品50点を入れて合計98点。高温多湿の風土による腐敗を承知で作品の9割を屋外設置。既に初期の屋外設置作品の3割は撤去した。

井波木彫刻は室内の仄かな光のなかで愛でられる精緻な手わざが特長。一方、大空をバックに空間を斬った大型の木彫刻は朽ち果てて土に還りゆく輪廻と循環のメッセージを発信する。木彫刻の屋外設置化は井波にとって新しい試みだが、もともと寺社の外回り彫刻は雨曝しに近い。さらに完全な屋外化には価値づけと普及が必要だ。木彫刻の需要創出も重要な視点である。しかし、屋外作品の長期保存は万人の願い。リトニアのチャペル塔やカナダのトーテムポールに倣い、設置方法の改善や防腐剤塗布に尽力。共にパブリシティを兼ねた映像ミュージアムやアーカイブスの必要性を行政に訴えている。

最後に、美術協会員の半分強は職人が生業。低成長下では彫刻組合員にとっても社会貢献は憂鬱。今後、NPOへの期待が大きくなっていくであろう。（富山大学教授／はせがわ そういちろう長谷川総一郎）

地域の伝統工芸が 新たな世界を生む

～ ごてんまり・糸から広がる世界～



由利本荘市の伝統工芸「ごてんまり」は、模様的美しさもさることながら、使われる糸の発色の美しさ、光沢、質感等の魅力に溢れている。その糸を表現素材として活用することにより、生徒の創作意欲と豊かな発想を促すと考え、「糸から広がる世界～或る工芸作家の新作発表～」という題材を実践した。

生徒はごてんまりそのものは知っているものの、模様の種類や素材等をほとんど知らないため、事前学習として日本や世界の伝統的な文様を鑑賞したり、本物の糸を使って色彩構成の学習(接着パネルの一部に糸を貼り模様を作る。糸の周囲は色画用紙を貼って仕上げる)をしたり、また家庭科の時間と連動して刺繍や編み込みの簡単な技能を習得してから本題材に臨んだ。また糸以外にも木材、布等多様な素材を多数準備し、生徒の発想を刺激できるようにした。

事前に知識と経験を積んでいたこと、様々な素材を自由に使って良いこと、そして何よりもごてんまりの糸の美しさが生徒の興味・関心を高めたようで、独創的なアイデアが想像以上に多く見られた。また作品の形態、使う素材が違って、大半の生徒は糸をぴんと張るデザインを

考えていたり、黒、紺、紫といった暗めの色の布を選択する等、生徒は糸の魅力を深く理解し、その美しさをより際立たせる方法を自分なりに工夫していた。

糸を素材のメインに据えた題材は初めてであり、正直生徒がどのような反応を示すかわからなかったため、制作上の条件を「必ず糸を使うこと」「完成後飾る(あるいは使う)ことができるものにすること」の2点に絞り、できるだけ生徒の自由にさせた。しかし発想が拡散したり、中学校の学習では収まらない大がかりなものを考えたり、自分の技能との差が大きく、途中でアイデアを変更せざるを得ない場面等が見られ、やはり多少制限を設けて、作品の方向性を教師がある程度つける必要があることを改めて感じた。また生徒がイメージ通りに表現するための、あらゆる領域での基礎的な技能の習得を考慮した題材の研究をもっとしなければならぬとも感じている。

昨年度、秋田県造形研究大会で授業を公開することになり、新しい表現素材の開発を念頭にこの題材を実践した。反省、改良すべき点はたくさんあるが、生徒の意欲の高揚と豊かな発想が、想像以上に見られたことは大きな収穫だった。来年度以降も継続、発展させてこの題材に取り組み、かつ他の素材の新しい活用の仕方なども模索し、生徒のより自由で豊かな表現を引き出したい。

(秋田県由利本荘市立本荘南中学校教諭

なか おゆうこ
中尾裕子)



糸の質感・強度を
確かめる

ブクブク泡、 その下に魔法の染液が

～ 発酵菌が主役の藍染め ～



藍草栽培の発生

エジプトはナイルの、そして、藍は吉野川の賜である。一昔前の阿波の国（現在の徳島県）では吉野川流域の地が毎年、洪水によって土砂が堆積し、肥沃な土地に転じた。

この吉野川流域の脇町で、1247年建性寺を開いた禅僧翠桂によって中国伝来の藍の種が蒔かれ、藍作が始まった。その後、豊臣秀吉によって阿波藩主に任命された蜂須賀家政が財政を安定させるために藩をあげて藍の栽培を奨励した。これによって、藍草の生産量が画期的に増大し、質の向上と相まって阿波藍が全国に出荷された。

現在、かつての藍商のいくつかは保存されている。実習・販売などを含めた総合資料館である藍住町歴史館「藍の館」はそのひとつである。

藍の町より人参の町へ

だが、明治に入って、藍の含有量の多いインド藍の渡来、引き続き合成染料インジゴの輸入は、阿波藍を徹底的に打ちのめしてしまった。かつての藍の町藍住町は、現在、人参の町に、石井町はほうれん草の町に変転している。

藍草の栽培・加工

藍草は3月に種を蒔き、7月に1回目の、8月に2回目の刈り取りを終える。

藍草に含まれる色素は、完全な藍（インジゴ）にはなっていない。そこで、藍草に含まれる発酵菌によって藍葉を腐敗させ、同時に藍色素インジゴを合成させる。これには、「ねとこ」

※なお、上記伝統的染色技法は、設備・コストなどの点で、教育現場で採用不可能である。徳島県内の教育現場でも、藍に対する関心はかなり高く、藍草を生育して、「生葉染」を試みたり、簡易・安価な「合成藍染」等の方法が採られたりしている。しかし、染色面に限れば、伝統的な染色技法に変わらぬほどの妙味を味わうことができる。

と呼ばれる作業場で、摘み取った藍葉を高さ1メートルにも積み重ね、3か月間、ほぼ5日ごとに水をかけて藍染料インジゴを合成する。これがインジゴ含有量約4%の「すくも」である。

藍染液の作成

インジゴが生成されても、インジゴは水に溶けず、布や糸に直接染着しない。そこでインジゴを一旦水に溶かして、藍染液を作るのであるが、この過程を「藍を建てる」と言っている。

実際には、270リットルも入る大がめを上方まで土中に埋め（温度調節のため）、この中で《すくも・石灰・灰汁・小麦粉・水》を仕込む。石灰などはPH調整のため3回くらいに分けて投入し、毎日適時に攪拌する。最終的には、PH約11、温度約26℃が適当条件である。5～10日して液表面にブクブクと、小麦粉が発酵分解して生じた炭酸ガスの泡が発生する。これが「藍の華」であり、藍染液生成の証左である。

藍染め

藍の華の下の藍染液の内部は上記の過程で、もともとは不溶性のインジゴが水溶性のホワイトインジゴに転じて黄緑色を呈している。ここに糸や布が漬げられると藍染液がよく染み込み附着する。これを空気中に曝すと黄緑色が徐々に藍色に転じていく。ホワイトインジゴが再びインジゴに戻ったのである。藍染めとは「インジゴで始まりインジゴに終わる」に他ならない。

（鳴門教育大学名誉教授／中川存^{なかがわたもつ}）

大自然の中で 美術作品を楽しむ

～ 大地の芸術祭 ^{えちご づまり} 越後妻有アートトリエンナーレ ～



地図を片手に芸術作品を捜しながら里山や街並みを歩く、夏場にはそんな姿に新潟県の妻有でよく出くわす。これはこの地を訪れた人々が里山のあちこちに点在する作品を捜しながら鑑賞する姿である。十日町市、松代町、川西町、松之山町、中里村、津南町の6か町村にまたがる妻有地域で繰り返し広げられた「大地の芸術祭アートトリエンナーレ」は、2000年に第1回、2003年に第2回が開催され、国の内外から延べ300人・組の著名なアーティストが参加した前例のない大規模な展覧会である。現在、会期終了後も半分近い130点が野外を中心に恒久設置されており、雪に覆われる冬場を除いていつでも見ることができる。全部を見るには自家用車でも最低2～3日を要するが、見る作品を絞ったり地域別に何度か足を運ぶことで、いろんな楽しみ方ができる。

このアートトリエンナーレの最大の特徴であり醍醐味は、何ととっても大自然に展開されるそのスケールにある。大地そのものが展示場であり、棚田や森の自然とともに芸術作品を鑑賞できる。建築、ランドスケープ、彫刻、立体作品、民家の再生や廃屋内外での展示など内容も多種多様で、この地域ならではの作品群が目立つ。とくに、この地域の歴史や自然・地形を踏まえた作品や自然環境にマッチしたその場固有の作品が多いのも特徴だ。また、地域の住民や子どもたちが参加したワークショップによって出来上がった作品を組み込んだ作品なども多い。まさに協働によって生み出された作品と呼ぶに

相応しい。

訪れる人々にとって新鮮な作品や自然に出会えるだけでなく、そこに生活する地域住民にとっても現代美術との出会いは、新鮮であり驚きでもあったようだ。「最初は訳分からなかったども、いっしょに参加しているうちにだんだんとおもしろくなって、自分たちで何かやってみたいという気になって作家に接し手伝いできたネ」、「アーティストってのは我々が思いつかんようなことをやるもんで今までの見方がまるで通用しねかったんだが、裏切られたりするんが楽しいデ」「最初戸惑ったども、作家の先生と協力して作業していると自然と自分たちのことや地域のことに目向けるようになったデ」。こうした地元の住民の声は、そのままよそから訪れた鑑賞者の気持ちにも通ずる一種の新しい体験の場とも言える。かつては現代美術やアートとは最も縁遠い地域と思われた過疎の進む山間地域での展覧会や作品設置は、確実に見る者や地域自体を変革するパワーを秘めているかのようにさえ思われる。

例えば、天井を正方形に開けて刻々と変化する空の色と光を体感できるジェームズ・タレル「光の館」、廃屋を舞台に集落の歴史と自らの表現を見事に結合した彦坂尚嘉の「田麦集落42戸物語」、巨大な鉄板を張りめぐらした公園を作って逆にその地域の風景や地形といった自然環境そのものを際立たせたカサグランデ&リントーラ建築事務所の「ポスト・インダストリアル・メディテーション」、手塚貴晴・由比の「森の

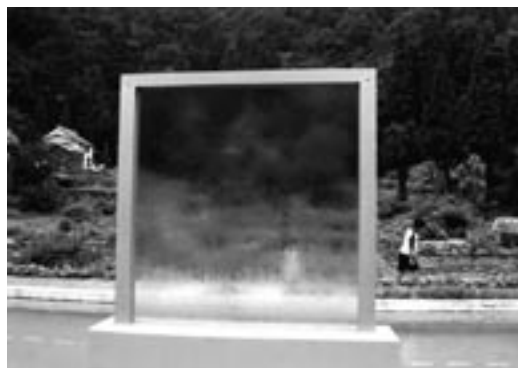
学校キョロロ」は意表を突いた表面が赤錆の鋼鉄板で巨大な蛇を思わせる建築は周りの森を一層深いものにした、本間純の「Melting Wall」は、廃校になった小学校のプールにガラス板を立て上から水を流す仕掛けにより揺らいだ向こうの風景を見せた、という風に枚挙に暇がない。

場所も素材も表現方法も異なっているにもかかわらず、そこでしか成立し得ないく場の共有とも言うべき志向性が作品・表現の根底に共通している。妻有の自然・風土・歴史・人々・生活のすべてが、作品の成立過程と表現素材の一部として組み込まれている。これは驚くべきことだ。なぜなら、これまでのどのビエンナーレや国際展でも、総体として地域と関わって表現を追求し、そこに恒久的に設置され続けた例はほとんどないからだ。

このトリエンナーレは、新潟県の推進する「ニューにいがた里創プラン」の一つで、妻有の地域活性化事業として10年がかりを想定して



中里村：「ポスト・インダストリアル・メディテーション」
カサグランデ&リンターラ建築事務所（フィンランド）



津南町：「Melting Wall」本間純

立ち上げたものである。いわばアートによる地域起こし・地域づくりである。予定では2006年に第3回展を迎えることになるが、ここにきて困難な状況に直面している。昨年起きた中越大地震がこの地域にも未曾有の被害をもたらしたのである。野外作品の多くが損傷し、また財政的にも災害復興に追われて芸術祭に多くを割けないからだ。前述した「光の館」も被害の大きかった作品の一つである。屋根が歪み、壁にひびが入り、戸が散乱するなど、その修復に長期間を要した。しかし最近修復され、見学が可能となった。芸術祭の作品や施設を自治体も地域住民も地域の自然同様に自分たちの宝物・財産として守って行こうとの強い情熱と愛着を感じる。この困難を乗り越え、アートによる地域の活性化が図られれば、恐らく世界に類を見ない新しいアートの可能性とともに、新たな地域づくりのモデルとなるに違いない。

（アーティスト／^{まえやまだし}前山忠）

写真による

地域文化の発見と創造

～ きた み まき ぶら 北御牧村写真プロジェクト ～



北御牧村写真プロジェクトは、平成15年10月から平成16年6月の8か月間、長野県北佐久郡北御牧村の全村民5,700人と3人のアーティストによって取り組まれたアートプロジェクトである。北御牧村は平成16年4月1日に隣接する東部町と合併し東御市となった。プロジェクトではこの合併を機に村民一人一人が形として見えにくい北御牧の文化を、写真を撮ることで視覚化し、あらためて確認し、共有してみようと試みた。誰もが参加できる身近な写真という表現手段を用いて、一人一人の感性で思い思いの対象を捉え、表現し、その集合体から地域の文化（世代観、価値観、地域性、村民性など）を浮かび上がらせたいと考えたのである。

一人1枚写真

村の文化を浮かび上がらせるためには全村民の目で捉えた写真が欲しい。そのような思いに応じてくれたのが富士写真フィルムであった。プロジェクトのために村民一人につき1本のフィ



一人1枚の写真を見る村の人たち

ルムを提供していただいた。プロジェクトの運営は実行委員会を住民主体で組織した。準備から実施まで約半年かかり、村内全戸にフィルムを配布できたのが9月末である。村民には翌年の4月までの8か月間で「未来に残したい北御牧の風景」というテーマで写真を撮ってもらい、その中から各自気に入った1枚を2L判に引き伸ばし展覧会に出品してもらった。

アーティストとの共同制作

村を捉えるときに村民だけでは完全ではない。なぜならば、自ら住む地域のよさに気づいていない場合も多いからである。そこで、本プロジェクトでは作家との共同制作を考えた。作家が北御牧村にどのように感応し、村民との共同制作で作品に表現していくのか非常に楽しみであった。また、この作家との共同制作は、アートを身近に感じてもらう良い機会であるとも考えた。

佐藤時啓氏との共同制作では参加者に自宅から手鏡を持参してもらった。中学校の裏手にある、村の中心を流れる鹿曲川で、太陽の光を反射させ写真に焼き込む作品づくりを行なった。場所の選定には中学生が関わった。総合的な学習で鹿曲川浄化活動に取り組んでおり、場への思いが込められている。

平成16年1月4日午前10時40分撮影が始まった。参加者は200人を超え、各自思い思いの場所からカメラに向かい光を反射させた。「村内に住んでいるけど、こんないい所があったなん

て気付かなかった」という参加者や、「光をカメラに当てるのが難しかったなあ」と純粋に楽しんでいるお年寄りなど、イベントに参加することにより地域や、アートのよさや面白さを改めて確認したのではないだろうか。

4月には同じく佐藤氏が巨大カメラを牽引して村内の風景を撮影するワンダリングカメラプロジェクトを行った。その巨大カメラの中に入ってみるワークショップでは床面に写る風景に大人も思わず声をあげていた。

共同制作は佐藤時啓氏の他に橘正人氏による「笑顔の写真リレー」、大木道雄氏による「五感で探る自然の叡智」「無限渦巻」に取り組んだ。



巨大カメラの撮影－ワンダリングカメラ－

梅野記念絵画館での写真展

さて、村民一人1枚の写真と、作家との共同制作の作品、合計6,000枚の写真が、地元の美術館を中心に展示された。青木繁の作品を多数展示している美術館であるが、村民の多くがこの美術館を訪れたことがない。このプロジェクトをきっかけに多くの村民が初めて美術館に足を運んでくれた。中には1日で見きれないと3

日間通い続けたお年寄りもいた。

「一枚一枚の写真を見ていると、みなさんが大切にしているものが伝わってきた」、「ふだん何気なく見過ごしている風景は実はとても美しかったんだと気付いた。この土地に生まれて良かったと感じた」等の感想が多く寄せられ、また、佐藤時啓氏の写真作品を見て、「自分が参加した写真だからとっても気に入っている」「人が消え光だけが写っていてとても幻想的」など、村民にとっても身近にアートを感じる良い機会になったのではなかろうか。

表現する力ー見る力

このプロジェクトを通して感じたことは、一人一人が表現者であるということである。誰もが参加できる写真という表現手段で、自分の思いを表し、作品を鑑賞しあい、自らの世界を広げていく。この働きは美術そのものである。写真を撮って飾るというこの単純なプロジェクトは結果として北御牧村という一自治体の住民5,700人を「表現するー鑑賞する」という“美術”に巻き込んだ。写真を撮る行為で自分達が住む地域の文化を視覚化し、その作品を相互に鑑賞することで改めて地域文化を共有していく。プロジェクトを通して“これからも地域の中で失うことなく大切にしていきたいもの”を鑑賞者はつかんでくれたと期待する。この取り組みはアートによる地域発見であると共に自分の生き方発見であったのかもしれない。

(文教大学講師／三澤一実)

みやこの名残り

～ 京町家再生の取り組み ～



京都のまちなかは碁盤の目になっているといわれる。確かに縦横に通った道がわかりやすく、その町に住むものは通り名と「あがる」「さがる」「西入る」「東入る」を使い分けて自分の行きたい場所を特定できる。昔々、平安京が出来たときからの計画だったと聞いている。通りをはさんで町内ができ、狭い町中に肩を寄せ合っ

て瓦屋根が並んでいる。まちなかを歩いていると、いろんな町家と出会う。どっしりと貫禄たっぷりな家、華奢でやさしいたたずまいの家、モダンな雰囲気を醸している家、格子の隙間から中が見えないのかと、目を凝らしても、表の明るさに比して奥の暗さからは何もうかがえない。ちょっと秘密めいた暗さが見えるだけ。格子、土壁、瓦屋根、あるものは同じなのに、それぞれに違う表情を持つ町家。長い年月を暮らしと共に生きてきた証拠がそこに現れている。一軒一軒、表情が違うのは、きっと中に住んでいる方々の個性が自然に表に現れているからこそ、暮らしが家を磨いている。

町家はその呼び方の通りまちなかに建っている家のことである。第2次世界大戦にほとんど空襲にもあわずに、昔ながらの町の形が残っている都市である京都の市中に建っている戦前の木造住宅のこともある。建物が完成された形



(左) レストランとして再生された町家

(右) ギャラリーとして再生された町家の内部 (事務所部分)

を持ち出すのは江戸時代と聞いているが、その後100年以上ほとんど、変わらずに生きてきた。戦後、急激な生活形態の変化や高度経済成長政策によってまちなかは大きく変わり、洋風の暮らしが京都の暮らしを席捲した。今も日々建設される高層マンションとの共棲でかつての町の姿は消えつつあるが、町家が京都の中心部にはいまだに2万8千軒生き続けているというのも事実である。戦災に遭わなかったことが大きな意味を持っているのだが、その意味の大切さをどれほどの人が感じているだろう。幸いに近年それらの古い建物の価値を再評価しようという動きが活発になり、平成4年に町家の再生を目指して結成された京町家再生研究会の仕事は日々増えつつある。

京町家再生研究会が発足して13年、町家の再生を活動の中心としているが、発足当初より様々な相談が舞い込んでいる。建物の維持管理、修理の問題や維持の方法、町家を借りたい、貸したい、売りたいといったことなど。すべてがうまく運ぶわけではないが、メンバーが走り回り、情報を集め、それぞれの知識や経験を活かし対応している。古い町家に新しい血が流れ出

すところを私たちは目の当たりにしているのだが、町家が生まれ変わる様子をつぶさに見ることができるのは私たちの役得である。

お店を閉じられてひっそりとしていた大きな呉服問屋はケーキ屋さんへ変わった。桜の美しい公園の前にひっそりとたたずんでいた町家は華やかに蘇り、通りに賑わいを呼んでいる。ギャラリーになった空き家や、小さな子どもに暮らしを感じさせたいという若いご夫婦や、シェアハウスという新しい考え方で町家に暮らす若い人たちが年老いた町家に再び活気を取り戻させてくれる。

縁あって、町家に暮らすことになった私にとってはこれらの動きは大変心強いものであり、私自身の暮らしを見なおす良い機会ともなっている。雑誌のグラビアページを飾るような美しい町家も多くあり、日一日と町家に対する評価が高まってきている。私の暮らす町家は100年をこえてはいるが、いまだにしゃんとしていて、たった20年を付き合っている私のほうがまだまだ育ててもらっていると言う感がいなめない。100年と言う歳月は長く、その間にこの家にどれだけの人々がかかわったのかということ想像するのは楽しいことである。雑巾をかけていると、この家の柱や階段、踊り場、廊下はつやつやと黒光りがしている。長い年月を、多くの人たちの手によって磨かれ、慈しまれた結果が見えてくる。幸せな家であっただろうと思うとおろそかにはできない。先達が大切にしてくれたことをせめて少しでも受け継いでいきたいし、



火袋

「とおり庭」は表から奥までまっすぐに一本通る土間である。「はしり」と呼ばれる台所の部分の上を見上げると吹き抜けの梁と貫が交差した「火袋」が見える。火事の際には火がここへあがり、延焼までの時間が稼げるといふ。



格子

格子は町家の顔である。糸屋格子、米屋格子、炭屋格子などの呼び名

は、格子のデザインが職業を表していたが、それも昔の話。外から中は見えにくく、中からは外はよく見える。

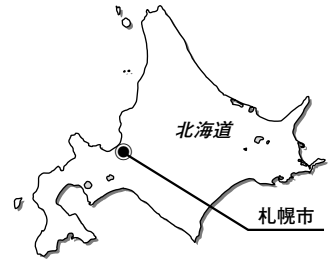
今でも家にしつけてもらっているような気がしている。

エアコンディションの完備により年々同じ環境を作ることにも可能になったが、町家の冬は寒く、夏は暑さを凌ぐ工夫をする。コンパクトな生活をうらやましく思い、隙間風のない建物の快適さにも憧れはあるが、暑い夏を暮らす工夫、寒い冬を越え、春を待つ楽しみは人工的に造られた環境では味わうことはできないだろう。急激な暮らしの変化があり、それに立ち往生した町家の暮らしではあるが、1200年という都市生活の知恵、積み上げられてきた暮らしぶりがそこに見られる家である。新しいものは便利できれいで目を惹かれるが、長年積み重ねられた暮らしの知恵を見過ごしてしまうのはあまりにもったいないと、すこし声を大きくしたい。

(京町家再生研究会事務局長／^{こじまふさえ}小島富佐江)

札幌芸術の森 野外美術館

～ アートを授業に ～



札幌芸術の森

札幌市の南に位置し、自然環境豊かな丘陵地帯に、野外美術館、屋内美術館、工芸館やクラフト工房、ガラス、陶芸、木工、版画などの工房と彫刻や絵画制作のためのアトリエ、陶芸の登り窯など美術工芸施設に加え、音楽、バレエの練習や発表が行えるアートホール、プロやアマチュアの音楽家が発表に使用する野外ステージなど多様な施設が、40haという広大な敷地に配置された文字通りの「芸術の森」です。

野外美術館

芸術の森の中でも中心的な施設で、表情豊かな自然に包まれた7.5haの丘陵には、国内外65作家の作品74点が展示されています。風やコンピュータで動く作品、鏡面効果で回りの自然を映し出す作品、自然環境を素材とした作品など具象、抽象の多様な彫刻を楽しむことができます。作品の素材も、野外設置という条件に合わせて、ブロンズ、石、鉄鋼、ステンレス、コンクリート、ポリエステル、木、水など各種の素材が使われ、それぞれの素材の質感や特徴を楽しむ事ができます。四季の移り変わりが作品の背景と



福田繁雄
「椅子になって休もう」と同じポーズをとる。

なり、彫刻の表情も季節の流れに合わせて変化します。冬は、「かんじき」を履いて、雪の中にたたくむ彫刻を視点を変えながら楽しむこともできます。

野外美術館と鑑賞授業

野外美術館では、作品解説ボランティアの方が作品の解説案内をしています。解説は無料で一般の入館者、観光客を中心に行っていますが、最近では、学校の授業での利用も増えてきていますので、小中学生への解説についても研修を深めて対応しています。図工科、美術科の鑑賞学習や美術クラブの活動、総合的な学習の場としての利用が多く、今年野外美術館を訪れた小中学校は60校を超え、本物の彫刻と素晴らしい自然に触れて豊かな時間を過ごしました。ボランティアの解説利用については、事前の申し込みを受け、学年の特性や学校の要望なども考え解説に当たっています。1人で1クラスを受け持つ場合もあり、貴重な学習時間であるだけに、担当教師との連携を大切に取り組んでいます。野外美術館の作品は、自由に触れることができるので、五感を通した鑑賞に適しています。昨年は盲学校中学部との美術学習の取り組みが行われ、生徒の皆さんは彫刻に触れながら同じポーズをとったり感想を話し合ったりして作品との触れあいを楽しみ、貴重な体験の場として大きな効果を上げました。自然の中で本物の作品と触れあうことができるこの野外美術館をもっと学習に活用してもらいたいと願っています。

(野外美術館作品解説統括専任職／ふじいまさじ藤井正治)

開かれた美術館をめざして

～ 豊橋市美術博物館・ギャラリートーク ～



「開かれた」美術館

各美術館や博物館には、作品の制作された年代や、作者についてのことなどの詳しい情報を知り得ている学芸員が配属されています。近年、美術館や博物館では、来場した大人や子どもたちにそれらの学芸員らがそれらのことを解説する試みが進められています。また、子どもたちに気軽に足を運んでくれるように「ワークショップ」と銘打って、美術館で作品鑑賞をしながら作品作りに楽しんでもらう実践もなされています。美術館や博物館は、このように、堅苦しくなく、誰でも気楽に立ち寄れる、その町の文化の発信源としての役割をめざしつつあります。このような「開かれた」美術館、博物館こそが、これからの求められる姿なのです。

美術鑑賞が好きになるギャラリートーク

美術作品を前に、鑑賞者が学芸員を介して、それぞれの感じたことをお互いに述べ合うギャラリートークが、現在、各地の美術館でなされています。「この作品はこう見なければいけない」「この作品の素晴らしさはこの点にあります」など、今までの美術館は、パネルの解説などで一方的に情報を与えてきました。しかし、「私はここが好きだな」とか「この作品のこういうところは、僕はあまり好きじゃないな」など、人によって作品の見方は当然違います。そのように作品を見て感じたままを語り合い、それを受容しながら作品の情報を提供していくのがギャラリートークです。これにより、作品を見ることへの鑑賞者の興味はより強まります。



2枚目に見た、鬼みたいな絵は家のことを描いてありました。一番感激したのは、4枚目の絵で、細かいところまで気持ちが込められていることがわかった。今日の授業で、1つの作品にはいろいろな思いが込められていることがわかった。

学芸員の語る確立された情報との出会い

スライド・ショー後の生徒の感想

「出前講座」のスライド・ショー

行事や授業として、美術館に足を運ぶことがなかなか困難な場合があります。「開かれた」美術館では、学芸員を学校まで派遣して、鑑賞の授業のお手伝いをするも行っています。写真のように、実際に中学校でも学芸員と生徒によるスライド・ショー（美術作品の写真の前に教師や学芸員と生徒が思いを交流し合う鑑賞の形式）が行われました。地元出身の前衛的な日本画家中村正義の写実的なタイプ、風刺的なタイプ、フォービックなタイプのそれぞれの作品を鑑賞し、意見交流を行いました。自分の感じたままを受容された生徒の日からは、次から次へと様々な見方の自信にあふれる言葉が飛び出してきました。

(愛知県豊橋市立高豊中学校教諭 / 石橋一美^{いしばしかずみ})

風っ子展のあゆみ

～ 総合教育としての造形広場づくり～



沿革

相模原市のほぼ中央に位置するところに淵野辺公園があります。そこは、広々とした芝生の広場があり、県立の野球場や「銀河アリーナ」と名付けられた市営プールが隣接しています。平成17年度には27回を迎える造形さがみ風っ子展はこの広場を中心に行われてきました。昭和54年に「おかざきっ子展」(愛知県岡崎市)をモデルとしてスタートしたころの淵野辺公園は、基地(キャンプ淵野辺)の跡地で広大な空き地になっていて開催準備はまず関係職員総出の草刈りから始まりました。

現在では相模原市の人口も62万人を超え淵野辺公園も冒頭のように当時とはすっかり様変わりしました。参加の児童生徒の作品点数は当初、参加校(小・中学校)64校で約3万点あまりでした。最近では82校、2～3万点で推移しています。また市内の支援学級や近隣の高校、養護学校も当初から参加していて開催セレモニーでは支援学級生からの代表あいさつもプログラムされています。メインテーマの「世界の青空に広げよう創造と友情の輪」は創設当時から現在も変わらず掲げられています。昭和60年からは、「さがみ風っ子文化祭」と名称を変え、それまで個別に開催されていた部分(統計グラフ展・学校給食展・銀河連邦絵画作品展・銀河連邦教育交流・かかし展示コーナー・ふれあいコーナー)を同時開催として加えて現在に至っています。

総合的な学習との関わり

風っ子展の始まりの頃から見られた横断的合科的な作品づくりは「総合的な学習の時間」とともにひろがりや深まりをみせています。造形は体験を通し、心の中にある、目には見えない自分の思いや願いなどを形や色にして(創造と表現)具現化します。作品のひとつひとつにそうした体験の命が吹き込まれていきます。



淵野辺公園会場での作品展示

つくる体験

風っ子の広場には毎年造形コーナー、ワークショップ等児童・生徒・市民が参加できる「創作」コーナーが設けられています。小枝や毛糸を使って作る編み物造形は親子で語り、心を繋ぐ瞬間でもあります。インターネットを利用した本市の中学生と岡崎市の中学生の「未来の橋」づくりでは設計図に示された色や形だけでは作品はできずお互いの気持ちや思いを語らなければ、よりよい作品にはなりません。女子美術大学生のボランティアも参加してのメインステージのデコレーションは中学校美術部の生徒にとって格好の活動の場であり造形のアイデアが次々と広がっていきます。

地域へのひろがり

地域の学校や団体、個人の協力は造形教育を超える「総合教育の場」として、相模原市独自の地域の文化を育みつつあります。平成10年には伝統文化「大凧保存会」の方々と協力して野球場前の広場で大凧が空高く舞い上がりました。「新戸はやし保存会」のおはやし太鼓、機織り実演、おりがみ教室、野外体験教室「若あゆ」によるかかし展、地域の焼き物教室の人々のクラブや選択教科への関わりなどさまざまな形でひろがりを見せています。

合評会から

期間中に合評会を開催し外部講師による作品批評をしていただき、作品づくりや展示方法等のアドバイスを受けています。野外の作品を見つめ、造形を問い、教室の子どもの姿を考えることをねらいとしました。昭和61年から始められ、野外作品づくりの研鑽の場として位置づけ、素材開発、題材設定、などを会場で互いに語り、造形教育についての思いを新たにしています。

新たな試み

平成15年度から「屋内展」として女子美術大学アートミュージアムでの展示を始めました。野外展の屋内版は、野外の風、光、空気、土とは全く違った環境にあります。限られたスペースを意識しての作品づくりや展示は淵野辺公園でのものとはひと味もふた味も違う魅力を感じさせます。

小・中学校で連携して作品づくりが試みられています。私に関わった小・中学校が連携しての共同作品づくりは4年前から始まりました。中学生が小学校へ出向いて、作品づくりの手伝いをしたり、中学生の作品に小学生が仕上げをしたり、小・中学生が互いに学びあう姿には目を見張るものがあります。



女子美アート
ミュージアム
会場

記念展

平成16年度は相模原市の市制50周年にあたることから特別の造形展となりさまざまな企画が実施されました。「思い出の作品コーナー」ではかつて作品を創った生徒が親となり、親子で作品を並べたり、女子美アートミュージアム館長ヤマザキミノリ氏や韓国春川教育大学の柳芝英氏を招いての国際造形シンポジウムの開催、相模原市のホームページを活用しての「風っ子デジタル美術館」を開いたり、小・中学校が連携して共同作品づくりをしたり、盛りだくさんの企画にチャレンジしました。

四半世紀を経た風っ子展は造形教育に新たな地平を開きつつあります。

(さがみ風っ子展事務局)

自然と共存する建築

「アクロス福岡」

～「建築を良く見て考える」デザインの鑑賞～



今から約10年前（1995）アクロス福岡のように大規模に建物を植栽で覆ったものは全国でも珍しいものでした。

人々は、自然の力（雨や風など）におびえることなく暮らすことができるように、家（建築）をつくってきました。だからといって、自然に逆らってつくることではありません。自然と共に暮らすバランスのいい関係を私たちは探そうとしているのです。このアクロス福岡のプロジェクトが発表される前まで、都市のビルは、建物の周りに木や芝生を植えたり、開発と一緒に街路樹や小さな公園のような場所を整備することで自然とのバランスをつくってきました。そのような考えが一般的だったころ、このアクロス福岡の計画案は、大胆なアイデアで多くの人々を驚かせました。中には「本当にできるのかな」って思った人もいたでしょう。でもこの建物ができた頃から、地球環境を考えた様々な取り組みが注目されるようになって来ました。1997年の地球温暖化防止京都会議開催も追い風となって、今では、屋上や壁面に植物を植えるなど、自然とのバランスを考えた建物が増えつつあります。（ちょうど超高層ビルが増えるきっかけとなった東京の「霞ヶ関ビル（1968）」のように、このアクロス福岡は、緑化建築のきっかけの一つとも言えるでしょう。）

この建物を設計したのは、建築家のエミリオ・アンバースという人です。建築家は、建物や計画案という作品を通じて表現をし、これからの時代のあり方を提案します。つまり、色や形だ

けでなく、気候や歴史、習慣、さらにはそこに暮らす人々の未来を考える人でもあります。この建物は、出来上がって使い始めた（竣工）ときよりも、年を経るごとに樹木が生長し、アンバースが計画した姿に近づいているのです。この建物の表情は、植物の四季によって違いがありますし、さらに毎年、緑の成長による変化があります。建築は新しいことが良いわけではなさそうです。人や樹の成長のような時の流れも、しっかりと考えて計画するものなのです。

植物を積極的に建築に関わらせる手法として、屋上に植える屋上緑化と壁を緑で覆う壁面緑化があります。建築を緑で覆うことで、日光による屋根や壁面の温度上昇を抑えることができるのです。自然との共生は見た目だけでなく、技術的な裏づけもあるのです。建築という芸術は、技術も共に発展してきています。建物を実際に見学し、その建物が何でできているかなども含め、自然の扱い方や、バランス、技術など、いろいろな工夫の発見がデザインの鑑賞となります。

アンバースの提案した模型を見ると、本当の建物とはちょっと違う部分もあることに気づきます。模型は、段状部分のほぼ中央に滝のような水の表現があります。実現した建物では、光を通すガラスの構造物になっています。アンバースは、緑だけでなく水も共存した空間を計画していたようです。模型から、設計者のねらいを考えさせ、話し合うことも鑑賞を深めることとなるでしょう。

（建築家・東京学芸大学助教授／^{てつやえつろう}鉄矢悦朗）

地域のアート

京町家再生の取り組み

京都府 (⇒本文 p.12)



伝統的な京都の町並み

ギャラリーとして再生された町家

札幌芸術の森 野外美術館

北海道 (⇒本文 p.14)

冬の野外美術館

左から「四つの風」砂澤ビッキ、
「女・夏」佐藤忠良、「鶏を抱く女」本郷新



「隠された庭への道」ダニ・カラヴァン



地域のアートⅣ



豊橋市美術博物館

愛知県 (⇒本文p.15)

自然環境に恵まれた豊橋公園の一角にあり、郷土ゆかりの美術、歴史資料を中心に展示している。

豊橋市美術博物館 外観

さがみ風っ子展

神奈川県 (⇒本文p.16)

小・中共同で製作した作品の展示



アクロス福岡 提案用模型 (エミリオ・アンバース)

アクロス福岡

福岡県 (⇒本文p18)



福岡シンフォニーホールや国際会議場などを備えた複合施設。階段状の庭園は37,000本の樹木で覆われている。

弊社ホームページ「Kairyudo-Online」のご案内

<http://www.kairyudo.co.jp>

「Kairyudo-Online」は、開隆堂出版株式会社が運営するウェブサイトです。季刊誌「造形ジャーナル」の記事、全国の研究会情報、教材のご案内などを掲載しております。現在、Web展示会「みんなのギャラリー」を公開しています。全国の小・中学生の作品をご覧ください。また、「研究会情報」は閲覧だけでなく、登録も受け付けておりますのでご活用ください。

中学校美術科教授用資料

地域アートマップ

日本造形教育研究会 編

開隆堂出版株式会社

(2005.4)

| | | | |
|-------|-----------|-------------------|---------------|
| 本社 | 〒113-8608 | 東京都文京区向丘1-13-1 | ☎03-5684-6111 |
| 北海道支社 | 〒060-0061 | 札幌市中央区南一条西6丁目11番地 | ☎011-231-0403 |
| 東北支社 | 〒983-0043 | 仙台市宮城野区萩野町1-11-1 | ☎022-782-8511 |
| 名古屋支社 | 〒464-0802 | 名古屋市千種区星が丘元町14-4 | ☎052-789-1741 |
| 大阪支社 | 〒550-0013 | 大阪市西区新町2-10-16 | ☎06-6531-5782 |
| 九州支社 | 〒810-0075 | 福岡市中央区港2-1-5 | ☎092-733-0174 |

